

---

# 経営学部教授榊原貞雄先生を送る

経営学部長 大橋 哲

---

神奈川大学経営学部の榊原貞雄教授が、2018年3月末日をもって本学をご退職されるにあたり、国際経営論集題55巻を榊原先生の退職記念号として上梓いたします。長年にわたる先生の本学部への多大なご貢献を顕彰し、学部を代表して巻頭言において感謝の意を表するとともに、同僚としてのかわりの中で、私が先生から教えて頂いたことをご紹介します。

榊原先生は、米国コロンビア大学大学院で3つの修士号と経営学博士号を取得されたのち、昭和63年にミネソタ大学経営学部に助教授として就任されました。平成5年に慶應義塾大学の客員教授として帰国した後は、東亜大学大学院、学習院大学、慶應義塾大学国際センター、横浜国立大学大学院等の多くの国内教育機関の他、チュラロンコン大学大学院客員教授に就任するなど、幅広く国際的に研究・教育の両面でご活躍になられました。神奈川大学との関係は、平成12年4月に経営学部国際経営学科教授、経営学研究科教授としてのご就任からです。

榊原先生の神奈川大学就任当時、経営学部では新たに5コース制が敷かれるときでしたが、石積勝学部長（のちに学長）、榎本誠学科主任（のちに副学長）の執行部の構想で、国際コミュニケーションコースの学生を中心に数十から数百名の学生を海外に長期留学させるという、当時では例のない大胆な国際プログラムが提案されていました。経営学部では、世界各地での短期研修プログラムを実施していましたが、当時の学部受験者数の激減に対応すべく、今までとは別次元の国際プログラムの開発が必要と判断した執行部の提案でした。そのような状況の中で就任された榊原先生には、当初より本学部グローバル教育の中心的な役割を担っていただくことが期待されていました。私と先生の関係は、共にそのプログラムが実現した場合の実行部隊として想定されていたことから、一緒に活動したことに始まります。結局、当時その規模の国際プログラムを支援する体制が大学本部には整っておらず、計画が実現することはありませんでした。正直なところ、当時の私は、仮にそれが実現した場合に自分の背負うことになると思われる負担に不安を抱き及び腰でしたが、就任早々の先生の対応は、学生にとっての国際プログラムの重要性の理解に根差した国際教育に対する非常に強い情熱を感じさせるものでした。それが私にとっての先生の第一印象となり、今も変わらず先生のお人柄としてまず心に浮かぶところです。

私の理解する範囲での榊原先生の本学部へのご貢献は、目の前にいる学生を現実的に直視して、彼らに見合った教育をプラクティカルに実践し、少しでも国際舞台で通用する人材に近づけるべく努力を惜しまない教育方針を貫かれてきた点にあります。ご本人の国際経験に基づく教育に対する信念と情熱が、多くの学生を覚醒させ、彼らの目を広い世界に向けさせるのを、私自身が何度も目にしてきました。私は、英語教育を担当していることから、成績が良く意欲のある学生には、英語で授業を行っていた榊原ゼミを推薦したことがよくあり、その学生が全学の交換留学プログラムに選ばれるという流れが生まれました。近年では、マレーシアへの一年の派遣プログラム（BSAP）立ち上げの際に、最初は2人でも3人でも良いからとにかく派遣してみることが必要であるということ、何度も力説されたのは先生でした。現在、漸く毎年70名程度の学部生を海外に一

年間派遣する段階にこぎ着け、また海外からの受け入れの留学生も徐々に増えてきたことは、先生の一貫した国際教育に対する情熱が学部内で共有されてきた証だと思います。

2021年にグローバル教育のハブとなることを謳う横浜みなとみらいキャンパスへの移転が決まった本学部ですが、榊原先生の注がれた国際教育への情熱をしっかりと引き継ぐことを誓うとともに、今後も学部のためにぜひとも先生のご指導ご鞭撻をお願いする次第です。